

# 松浦武四郎の日誌に見る

## 石狩川流域



「石狩日誌」の表紙

した。その安政4年（1857）の流域踏査の模様をまとめたのが「石狩日誌」です。

その行程は、まさに前人未踏です。現在ではどんな場所にでも行けますが、武四郎が生きたその時代は、川も道も自然そのものでした。川は時には恐ろしく牙をむき、無数のヤブカが人を襲い、クマやオオカミがたくさんいました。

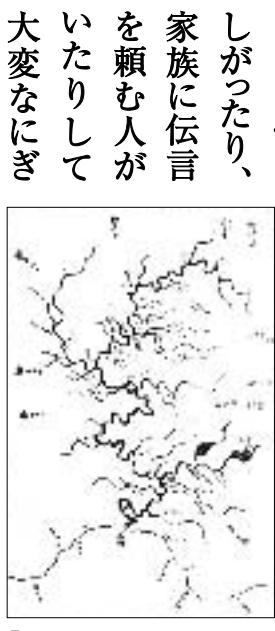
函館に着いた武四郎は、4月25日に函館を船で出発します。大野に着き、そこからは

陸地を黒松内まで行き、やがて尻別川の河口、磯谷に outs。その後、今度は丸木船で海岸に沿つて岩内、余市、小樽を経由して5月10日に石狩に着きます。

そしていよいよ5月12日、河口の石狩から石狩川を遡っていきます。

川に舟を出すと、近くにいたアイヌたちが集まつてきて、武四郎たちが川上に行くことをうらやま

に松浦武四郎はアイヌの人たちとともに石狩川の調査を行います。石狩川を遡り、ウリウ（現在の雨竜）川まで行き、そこから山道を越えて、ルルモヅペ（現在の留萌）まで踏査しました。翌年、箱館奉行所からの依頼を受け、今まで誰もたどり着くことのなかつた石狩岳に登り、山脈・水脈の調査を行いま



「石狩日誌」にある地図

わいでした。やがて少し行くと、鮭漁小屋がたくさん並んでいる場所が見え、このあたりは鮭漁が盛んだということが分かりました。

岸の柳の枝を切ってまげ、舟ばたに結びつけ、上にフキの葉をかぶせて屋根をつくりました。権にもフキの大きな葉を一枚結びつけて帆の代わりにしました。



石狩川をさかのぼる舟に、フキの葉の屋根

●全流域●

閏5月4日から今度はそれまでとは逆に石狩川を下ります。閏5月16日、トック(現在の徳富)にまで戻りました。

翌日から今度は空知川を遡り、富良野まで踏査しています。

閏5月20日に徳富まで戻り、石狩川を下つて閏5月22日の夜に、ようやく出発地点の石狩の本陣まで帰つきました。

武四郎は何十日か振りに風呂に入り、髪



山中の野宿のようす

を洗い、布団で寝たのでした。

箱館奉行の処置に對して、非常に感激したと綴り、「石狩日誌」を終わっています。

「石狩日誌」には、道中の石狩川のことはもちろん、アイヌの人々との交流やその人たちの暮らしぶり、初めて訪れた場所に生息する動物や植物などの事が文章と絵で克明に書かれています。特にそこに描かれているさし絵は見事で、臨場感あふれる興味深いものです。

閏5月24日、箱館奉行が石狩に到着します。箱館奉行は武四郎をねぎらい、この石狩川の調査の模様を詳しくお聞きになりました。翌日、奉行はこの地に住むアイヌ5名に對して、「玄米5俵」と石狩、小樽、厚田の場所請負人から買い上げた「鉗」を無償で与えました。

当時、松前藩はアイヌに農耕を禁じていましたが、武四郎から話しを聞いた箱館奉行は、アイヌの人たちへの感謝の気持ちから、今後は和人同様に田畠の耕作が出来るようとの考えによるものでした。

アイヌの人たちと危険を顧みずに、寝食をともにして石狩川を踏査した武四郎は、この

松浦武四郎(まつうら たけしろう)



松浦武四郎は1818【文政元】年、紀州藩郷士松浦時春の四男として【志郡須川村】(三重県松阪市小野江)に生まれた。1844【弘化元】年、27歳から単身蝦夷地探検に出発。翌年知床半島に「勢州一志郡雲出松浦武四郎」と題した標柱を立てた。次いで2度渡航し、千島を踏破、1849【嘉永2】年『三航蝦夷日誌』を幕府に提出した。これが認められて1855【安政2】年、箱館奉行に起用され、以後3度にわたって北海道の内陸部を実際に歩き、自然や動植物、アイヌの生活について多くの記録や地図・日記を残し、「東西蝦夷山川地理取調書」を著した。1869【明治2】年には蝦夷地開拓御用掛、開拓判官の役職に就く。

「北海道」(北加夷道)の名付け親である武四郎は、11国・86郡の名前を付ける仕事にもあたり、北海道開拓のうえで大きな貢献をした。

※明治の初めまで月の満ち欠けを基準とした太陰暦を使用していました。そのため約3年に1度、「閏月」を作り1年13ヶ月となる年を設けました。

## ●全流域●



石狩川の雄大な流れ

## 石狩川流域の概要と変遷

石狩川は、大雪山系石狩岳の西斜面に源を発し、ここから上川盆地、石狩平野を経て、432の支川を合わせ日本海に注ぐ我が国屈指の大河川です。

川の長さは268kmで信濃川・利根川に

5分の1の面積に相当します。流域内人口は平成19年の国勢調査によると、約312万2千人にのぼり、北海道人口の半分以上を占めます。

流域の気候は、冬期の多量の降雪など日本海側気候の特徴をもち、四季の変化が明瞭です。流域には大雪山や支笏洞爺国立公園など豊かで貴重な自然があり、北海道固有の動植物が生息し、また、サケやサクラマスの遡上も見られます。

現在、流域には札幌市、旭川市を含む46市町村があり、北海道の政治、経済、産業、文化の中核を担っています。

石狩川流域の中下流部に広がる石狩平野は、むかし石狩川が縦横に蛇行をくりかえし氾濫する、広大な泥炭性の低く平らな湿地でした。石狩川という名の由来は、「イ・シカラ・ペツ」、アイヌ語で非常に曲がりくねった川の意味からきています。大昔は現在の苦小牧市付近で太平洋に注ぐ河川でしたが、約3万年前に支笏火山群の噴火による火山灰、

次ぐ全国第3位、流域面積は利根川に次ぐ全国第2位の14,330km<sup>2</sup>で北海道全体の5分の1の面積に相当します。流域内人口は平成19年の国勢調査によると、約312万2千人にのぼり、北海道人口の半分以上を占めます。

未開の原野であった北海道に、開拓の斧が振りおろされたのは、明治2年に北海道開拓使が設置されたことです。その後、開拓者は川の近くに集まりました。しかし明治31年にこの新天地をおそつたまれに見る大洪水は、すべてのものを濁流の渦へと巻き込みました。この時の浸水面積は上流部では空知川合流点から、下流部では石狩湾までの平地、およそ15万haが浸水し、1112名が死亡しました。



岡崎文吉博士

この大洪水を契機に、北海道庁内に「北海道治水調査会」が設けられました。石狩川の10年におよぶ基本調査が実施され、明治43年に岡崎文吉博士が治水計画として

## ●全流域●

「石狩川治水計画調査報文」をまとめ、第1期北海道拓殖計画の一環として、石狩川治水事務所の開設とともに、北海道では初めて本格的な治水事業が始まりました。石狩川流域には広大な泥炭地や湿地帯が広がっており、これを人の住める土地とし、生産性の高い農耕地とするための対策がとられました。泥炭地は大量の水分を含み、そのままでは農地として役に立たないため、その水分を排水することと、農地面積拡大のために用水路の建設が不可欠でした。月形町の石狩川本川に石狩川頭首工が建設され、ここを起点に運河の整備が始まりました。また川の水位を下げ、泥湿地帯の地下水位を下げる必要がありました。石狩川の蛇行部分の直線化である捷水路事業が積極的に進められ、石狩川の長さは、約60kmも短縮されました。その結果、洪水は短時間で海へ流れるようになり、開拓の始まりから130年余の年月を経て、自然豊かで肥沃な大地へと飛躍的な発展をとげてきましたが、川のそばの低い平地において現在のような土地利用が可能となつたのは、昭和40年代に至つてからのことです。しかし、今でも、大雨が



明治31年の大洪水



昭和56年の大洪水

そこには、過去100年の河川の改修で川本来の自然が失われ、人々と川との繋がりが薄れたことへの反省があります。

石狩川全体で自然環境を守り、石狩川流域の連携をはかりながら、地域の活性化のために、北国の風土・文化を踏まえて、魅力的な地域づくりの軸となる河川整備を目指しています。

明治29年に初めて制定された河川法では「治水」を目的とし、昭和39年の河川法になつて「利水」目的が加えられ、100年間に亘つて河川管理の目的は治水・利水を主眼と

してきました。

## 石狩川の長さに挑む

●全流域●  
大河と呼ばれるのは、水量が多いとか、流域面積が広いとか、川幅が広い等、いろいろな意味を含んでいます。広辞苑には「大きな河、おおかわ」と説明がありますが、その中に広漠とした底知れぬ未知の世界がかすんでいるように感じるのは、思いすぎでしょうか。しかし、河口と水源の間の道程がどれほどあるかが、大河の条件の大切な物差しになるであろうことは間違ありません。

小さい川でも、その長さとか流路延長を決めるとなると、いろいろ問題がありそうです。河口や水源をいかに特定するか、流路をどこにとるか、法制上の管轄区分等、素人考えではとても決められそうにありません。まして北海道の心臓部を貫流する石狩の大河となると、たやすく事が明らかになるとは思えません。



高橋不二雄画 遷石狩画帖より(東京大学史料編纂所蔵)

今では三角測量網がはりめぐらされ、宇宙衛星を使った地図づくりがすすんでいて、石狩川の水源から河口までの写真を一枚の画面で見ることさえ容易になり、その流路延長を知ろうとすれば、あれこれ資料は整つ

ています。手元にある国土地理院『地理データハンドブック'93』によれば、石狩川水系の項に、幹川流路延長は268 kmとあり、ちなみにその河川数(支流を含め)は432、このの延長3,596.6 km、流域面積14,330 km<sup>2</sup>と載っています。

こうした情報が手軽に入手できるようになると、実に多くの人たちが生命の危険をいたしました。そこで、石狩川流域の様子を、ややくわしく文献で知ることができます。たとえば、天明5年(1785)半からです。たとえば、天明5年(1785)蝦夷地と呼ばれた北海道を一巡した江戸幕府の普請役佐藤玄六郎の記録から、二百年ほど前の人たちの石狩川に関する知識を推し量ります。

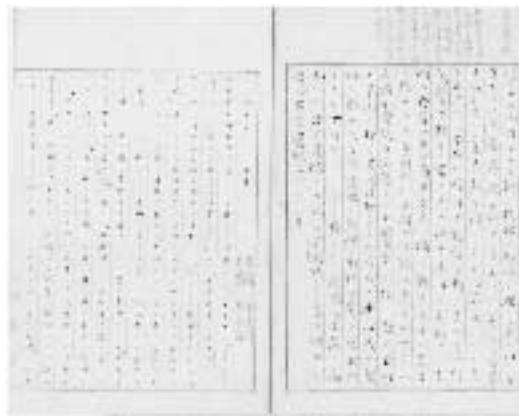
此地(北海道)、島中にての大河有り。蝦夷皆其流に臨て居。源は東部の地メナシ、エウベツの諸山より流出で、遙か下リニ川と成り、一川は北に流れテシホ川と云。其一片、島の中央を西に流れ、諸山の谷川合流してイシカリ浜に落つ。即ち是をイシカラ川と云。蝦夷の川舟、百里余は昇れども、其源の里数詳なる事を知らず。左右平原の地、広々として草木肥え、其幅員も計難し。

(佐藤玄六郎『蝦夷拾遺』)

険をいとわず、多大な労苦を積み重ねてきたのです。これは、大河ゆえに解きかねた謎、石狩川の長さを明らかにしようと、汗と涙を流した人々の物語です。



札幌県巡回日誌 九月六日の条  
(東京大学史料編纂所蔵)



札幌県巡回日誌 九月七日の条  
(東京大学史料編纂所蔵)

彼は北海道の現地調査をしたとはいって、石狩川の下流部を見ただけで、上流にまで足をはこんだわけではありません。流路延長を測つたり体感してはいないので、「蝦夷の川舟、百里余は昇れども、其源の里数詳なる事を知らず」というのは伝聞の書き取りです。そこから、2、3百年前の北海道で、石狩川の長さを百里以上もある大河だと言い合つていた様子を目撃することはできますが、誰もその正しい里数を知る由はありません。それでは、石狩川の上流部に踏み込んだ人の知識はどうだったのでしよう。佐藤から20年ほど後になつて、石狩川を探検した近藤

重蔵の記録には次のように書かれています。

イシカリ川之義は、惣蝦夷地之中央第一之大河にて、川筋水源まで凡百里余之間、左右打開け平地沃野のみにて、林木繁茂、夷人所々に住居、川上迄夷人之糧魚、夥敷有之。(近藤重蔵「惣蝦夷地御要害之儀」付心附候趣申上候書付) 文化四年)

現地で見聞を深めた近藤にしても、石狩川の流路延長を、「百里余」としかつかんでいません。これが当時の最良質の情報と言えます。

このような時代は長く続きました。幕末期に至つて、石狩川を見聞する人たちが急に増え、視察者ラッシュとなりますが、やはり「百里余」に変わりはなく、例えば次のような記録を残す人も出できます。

石狩は野中にして  
河の流有。甚だ大河

にして此辺に山なし。扱、イシカリ河源は数百里にして、川巾百五十間余も有之。右河上百五六拾里の間迄、夷人の住家、或は所々番屋有て、舟往来す。水上二百里計迄は行し者も有之候得共、従是先知る人なし。

(依田次郎助「蝦夷地旅行記録」安政元年)

噂はだんだん大きづくらんで、一部の人たちの間で、石狩川流域延長、「数百里」と伝えられたようで、計測されぬまま大河たる故の謎を秘め続けたのでした。

「石狩川は余程大河にて、幅狭き所は五六十間、広き所は百間余もあるべし。渺漫たる河なり。此水源、此頃松浦武四郎探索せしか。カムイコタンと云所より三四十里も深く探ししか、竟に水源を尋ね得ずして帰りたり。古昔、間宮林蔵も同様にて水源を尋得す。一説には男アカン山の麓より出でるといへとも、分明ならず」と云ふ」

(玉虫左太夫「入北記」安政四年)  
と言うのが、幕末期の実況を正直に述べているように思われます。このような状態で明治期を迎えることになります。

## 小説『石狩川』の舞台をめぐる

籍剥奪、土地や家屋を没収されました。

新政府は明治2年に開拓使を設置します。

当別町出身の作家・本庄陸男の小説「石狩川」は、明治維新で没落した仙台藩岩出山支藩の主従一団が、石狩当別へ集団移住する様を描いた北海道歴史文学の頂点に立つ作品です。陸男は刊行直後、34歳の若さで肺結核により亡くなりましたが、この小説を通して開拓前夜の石狩川の姿に迫ります。

陸男は明治38年2月28日、当別村ビト工番外地に生まれます。父は佐賀藩士で当別に開拓民として移住したのですが、陸男が9歳の時に破産し、一家は北見の開墾地へと移住します。

後のプロレタリア運動への弾圧など、自身のルーツと体験が執筆に大きく動因したといわれています。陸男の25回忌にあたる昭和39年に石狩川河畔に文学碑「石狩川」が建てられ、裏面には「いの一番にこの川を見つけたのは、肥えた鮭の群でもあつたらうか」と「石狩川」からの「節が刻まれています。

岩出山藩(宮城県)は、伊達政宗が米沢より移り住んだ岩出山城を本拠とする名門でしたが、戊辰の役後、石高を減禄、家臣は士全流域●

當時、本州からの船は小樽港に着き、汽船で石狩に、石狩の河口から石狩川を遡つて篠路に、さらに伏籠川を上り札幌を目指しました。川が道でした。

岩出山藩は、家臣救済のため、北門の警備と開拓を遂げることで、「賊軍」の汚名返上を決意し、北海道移住計画を発表しました。

空知郡奈井江の支配を許されましたが、石狩から遠く不便なので、再度請願し、厚田郡聚富の地を得ます。明治4年3月、第一次移住団は岩出山を後にして、たどり着いた聚富の地は、潮風にさらされた砂地で、作物は何ひとつ実らない所でした。絶望の果てに浮かんだのは、肥沃なる地“当別”でした。

許可を取り付け、開拓費用を得るために、石狩税庫建築工事を請負い、測量と道路開削のため、目的地に向かう段取りとなります。

「さり開こうとする彼らの道を、立つてそこから指すならば、あちら、——海に背を向けた東南辰巳の方角に穿たれる筈であった」



本庄陸男文学碑

行く渓谷にはいち早く宵闇がおとずれてい  
る。足もとの水は蹴立てられて白く泡立つた。  
が、たちまち暗い流れとなつて背後に遠ざか  
つた。深い山気の静寂がひえびえと身肌に迫  
つた。

原野を彷徨い、当別の地を見定めた一行  
は、2度目の踏査で、イチイの樹にたどり着  
き、その傍らには証となる標木を立てます。

「果たせるかな、聞きしにまさる肥沃の土  
地でござつた、巨木うつ蒼と天地を覆うとり  
ました、蘆葦の茫々としげれることはし咫尺  
を弁ぜざる有様、しかも、日の極まる限りは  
坦々とした原野つづき、その底を洗う清流  
はイシカリの支流なるわがトウベツ川でござつた」

●全流域●

一行は測量係、小屋係、本部隊となる道路

係に炊事係、物資の運搬ならびに連絡係に

分かれ、石狩(八幡町)から五里七丁(約20km)、

あのイチイの樹(当別神社)を目指します。

「雑木の繁った熊笹のやぶを南にまつ直ぐに  
おりて、そこに流れる最初の谷川にぶつかれ  
ば、即ちシラッカリの沢に辿りついたことであ  
る。これが第一の行程であった。小屋係はその

渓流のほとりでとつきの仕事をはじめねば  
ならない。道路係はその地点までを幅六尺に  
刈り分けねばならない」

これぞ彼らの新たなる戦場。熊笹の繁みを  
刈り取り、木の根を取り除き、雨水を除く  
溝も並行して掘り進めます。渓谷では木々  
を伐り倒し、崖を削り、橋を架ける作業を一  
つづけながら進みます。

「平地にはいつたこの開墾路は、盛り土の最  
後のモッコを、遂にぶつけた—終点の、ひろげ  
た傘のようなオンコ樹の根もとに。傍らには、  
『旧仙台藩伊達邦夷貸付地』と書いた標木  
が、草の海に浮んでいた」

明治四辛未歳五月二十八日建之—これが  
石狩川より北にはじめて入植した開拓団で  
す。その後当別は、他の士族団の中で一番の



石狩川畔奈井江原野 明治末期  
(北海道大学附属図書館蔵)



当別村市街 明治36年  
(北海道大学附属図書館蔵)



復元された伊達邸別館

実績をあげ、平等で文教な集落となり、念願  
だつた士族復籍も果たします。本編は、岩出  
山からの第一次移住団が到着するところで  
終わりますが、陸男には、続編の構想があつ  
たと言います。小説「石狩川」は重版に重版  
を重ねて、昭和31年には、大友柳太郎主演「大  
地の侍」として映画化されました。

陸男は小説の中で、石狩川を幾度も描写

し、その表現は、荒ぶる石狩川と未知なる大  
地の姿を鮮やかに浮かび上がらせています。  
「雪の絶えないヌタクカムウシユペの裾を西  
に折れ、山峡の低みをかけおりた水は、急湍  
となつて川上の浸蝕谷をよぎる。やがて盆地  
の水々を集めて西の壁である中央山脈につき  
当つた。かたい古生層の岩角をつき破つて湧き  
立つ奔流となり、イシカリの野に噴きだした。  
たいて翔び立つた」

根を張ろうとあせるのだ。季節が来ると  
川はあふれた。木の根や草の芽は鎧袖一触で  
あつた。堅い岸べもぼこりと削りとられた。す  
ると、辛酸した植物どもの営みは、まつさか  
さまであった。水は顛落するものを何でも呑  
みこんだ。黄泥色の濁りに底うなりを立て  
蠢動して行った。ときどき野鴨の群れが羽ば

たいて翔び立つた